



## 九州大学経済学部・経済工学科

一風変わった「経済工学科」が、昭和52年度、九州大学経済学部において経済学科、経営学科について第3番目の学科（学生定員80名）として設置された。新学科は数理的・工学的アプローチを通じて経済現象を分析・解明しようとする、いわば「文科と理科をミックスした」ユニークな学科である。数学、統計学、コンピュータを分析基礎として経済社会の予測・計画・管理を研究することを主眼としている。このような目的から、経済工学科は、数学的・計量的分析手法に関する講座と、その基礎のうえに経済・産業・企業の各レベルにおける組織管理・計画をとりあつかう講座から構成されており、既存の経済学科・経営学科と緊密な学際的協力関係に立っている。新学科はいくつかの斬新な特徴もっている。

まず、第1に、経済工学科は志望する学生に対して数学・理科にウエイトをおいた理系の2次入試を課していることである。教養課程では数学を理系各分野と同等あるいはそれ以上に重視し、線形代数学を中心とした代数学幾何学および多変数関数を中心とした微積分学を必修制にしている。したがって、経済工学科の学生はいわば、理系として入学し、文系として卒業するわけで、文系、理系の両方のセンスを身につけることが要求される。

学部では3学科とも第1外国語と第2外国語による原書講読を必修とし、国際性を身につけることを目的とし、3年、4年を通じてゼミも必修である。学部全体として特にゼミナールに力を注いでおり、合宿などを行なうことにより学問と人間を鍛錬することが伝統となっている。また学生に多くの発想と物ごとにとらわれない創造力を養うことを主眼として、カリキュラム上自由な選択の機会を与え、大局的視野に立って指導力と協調性を発揮できる人間の養成を目標にしている。

次に、教官の組織の面から、新学科では、「大講座制」なるものを採用したことがあげられよう。旧来の講座は原則として教授1、助教授1、助手1～2から成り立っているが、これでは多様化する研究領域をカバーし、あるいは流動的な人事を行なううえで制約を受ける場合がある。大講座制では1つの講座は2人以上の教授を置くことができるので（たとえば、教授2～3、助教授1、

助手1）、この障害はある程度解消されたことになる。経済工学科では4つの大講座で教授10名、助教授4名、助手4名を擁している。

経済工学科の第3の特徴は、文科系の講座の多くは非実験講座となっているが、経済工学科はすべて実験講座となっていることである。

大学院は修士課程が昭和56年度（経済工学専攻年当定員10名）、博士後期課程が58年度に（同5名）それぞれ開設され、現在経済工学として教育・研究体勢が整備されつつある。なお大学院は理系各学部の卒業生にも門戸を開放し、経済学・語学・数学を中心とし入試が課されている。

さて、4つの大講座の研究・教育の領域は大略次のようになっている。

### 1. 経済数学講座

本講座は経済工学科の特色をなす数理的分析手法の基礎を研究・教育する役割をもついわば要の講座である。経済学を学ぶ者にとって位相や代数の基礎を知ることには、経済理論全体への視野を拡げ、理論を深めるのに役に立つ。経済数学は、経済学で頻りに利用される数学を断片的に蒐集したというものだけのものではない。それは経済現象が適切に表現され、経済理論が合理的に展開されるための言語としての数学であり、オペレーションズ・リサーチの基礎理論という役目もはたしている。この講座には、経済数学（線形代数、微積分統論、微分・差分方程式、位相数学）、数理統計学（確率論、標本論、多変量解析、時系列論）、数理計画（LP、NLP、ネットワーク）および経済モデル解析（DP、変分法、制御）を含んでいる。社会・経済現象を解明するための「新しい経済数学」の開発が期待されている。

### 2. 計量経済学講座

ここでは数学・統計学およびコンピュータの手法を駆使して、経済レベルの諸問題をとりあつかう。この講座は数理経済学、国民経済計算、計量経済学、計画経済の4つの専攻分野から成っている。全体としては近代経済学と通常呼ばれている学問の典型的な領域を含んでいる。国民経済計算では、経済学の基礎的概念の理解が主要なテーマとなる。数理経済学は理論モデルの決定・解

析の問題を、もっぱら演繹的方法で考察する。それに対して計量経済学の方法は帰納的であり、データを基礎としたモデルの計測と計測されたモデルのデータへの適合性を統計的手法を用いてコンピュータで検討することがテーマである。

### 3. 管理工学講座

この講座は、企業行動のもつあらゆる側面を研究対象として含むが、もっぱら工学的分析手法が採用される。数理計画、数理経済学でとりあげる企業の最適行動に比べて管理工学の研究対象としてのそれは、はるかに実証的、具体的である。企業内部のシステムを分析し、現実的なモデルの決定と計測を行なう問題は必然的にコンピュータによる情報処理技術と結びつく。この講座には企

業経済学(意思決定論, 投資配分・決定), 管理工学(システム分析, 組織論, OR, OA, IE), 情報管理(記号論理学, 機械化会計, 情報処理)がおかれている。

### 4. 産業計画講座

この講座は産業の観点から経済構造の現状を分析し、そのあるべき姿を推計し設計することを目的とする。その分析方法は、産業そのもののもつ発展の論理と、産業に対する社会的要請との調和にもとづかねばならない。そのためには、組織化された資料蒐集や機能的な実態調査が必要である。産業計画講座には産業計画(産業構造, 産業政策), 産業配置(産業立地, 地域計画), 産業技術(技術論, 技術政策), 労働経済(労働経済学, 労使関係論)の4つの専攻分野がある。(児玉 正憲)

## 熊本商科大学

本学の構成は図1に示すように、商経学部のみ単科大学である。前身の東洋語学専門学校(昭和17年創立)以来の伝統からであろうか、国際交流が活発に行なわれている。具体的な活動は、南米、東南アジアを中心とする各国からの留学生の受入れ、米国・モンタナ州立大学等9大学(州立6校, 私立3校)との姉妹校提携、教員交換留学などである。また、研究機関として海外事情研究所が併設されており、また他の特色としては、産業・経済とこれに関連する諸事項の調査を目的とする産業経営研究所がある。

今年4月には、商学部に新たに経営学科が開設され、経営管理、経営情報を中心としたカリキュラムが組まれている。OR科目として、経営科学(3, 4年), 演習B(3年), 演習C(4年)を開設し、また、その他関連科目として、経営統計論、意思決定論、マネジメント・システム論、経営情報論、コンピュータ論、プログラミングなどが開設されている。

ところで、今年の7月22日から26日まで、ハワイ州、カウアイ島のワイオハイ(WAIOHAI: ホテル名)において、第1回ファジィ情報処理国際会議(The First International Conference on Fuzzy Information Processing)が開催され、筆者も発表者の1人として参加したので、この会議の概要を紹介させていただく。この会議は、日米欧のファジィ・システム研究グループの合同会議として開かれたもので、研究発表は以下のセッションに別れて行なわれた。すなわち、ファジィ数学、

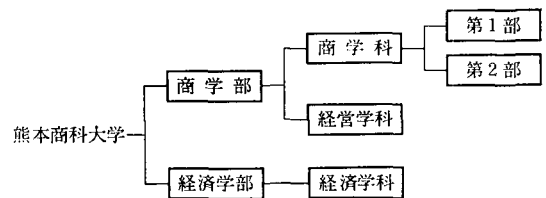


図1 熊本商科大学の構成

パターン認識、ファジィ論理、情報検索、ファジィ・データ・ベース、コンピュータ・ビジョン、決定理論、エキスパート・システム、コントロールとモデリング、マン・マシン・システム、オペレーションズ・リサーチ、意思決定システムなどである。ORのセッションは、ファジィ数理計画問題に関する発表が主であった。ところで、すでにファジィ・システムに関する研究者の国際組織IFSA(International Fuzzy Systems Association)が発足し、来年はスペインで国際会議が行なわれる。

また、数年後には東京でファジィ・システムに関する国際会議が開催される予定になっているので、この分野の研究がより一層活発になることを期待したい。

(野尻 秀之)